

『不可視の性暴力』

田中麻子〔著〕、大月書店、2016年

〔評者〕

村松由花梨

MURAMATSU Yukari

本書は、暗数の多い犯罪と言われる性犯罪の中でも、特に被害が認知されない性風俗従事者（以下、「従事者」と表記）に対する性犯罪に光を当てることを目的としたものだ。従事者に対する社会的なスティグマ化が、性暴力を告発しにくい原因であることを明らかにし、その障害を取り除いて「性暴力の可視化」（性暴力を社会に周知させること）の方法を探っている。本書は序章・終章を含めて全7章から成る。第1章から第4章では、性風俗の社会的地位の低さと性暴力の関係性を考察し問題点を確認する。第5章では、性暴力を可視化する方法を具体的に提案している。まず、本書の内容を紹介する。

第1章「性暴力被害者の苦悩」では、性規範や偏見から形成されるレイプ神話が性暴力被害者（以下、「被害者」と表記）にもたらす負の影響が説明される。レイプ神話とは、本書によれば性暴力やその加害者・被害者にまつわる社会通念のことであり、一般的にもたれている性暴力のイメージや被害者像、加害者像であるといえる。その存在ゆえに、被害者に非がないケースでも被害者非難を惹き起こす可能性がある。しかしそれだけではなく、被害者自身がレイプ神話にとらわれている場合には加害者の免責を生じさせ、被害者自身によって性暴力が不可視化されてしまう。また、被害者は「性被害を受けた者」としてスティグマ化され、差別や暴力が社会的に是認されることがある。被害者がそれを回避するために被害申告をしないことがあり、結果として性暴力を不可視化してしまうという。

第2章「性暴力被害者の差異と序列」では、被害者の「社会的カテゴリー」（人種や性別、職業など）がスティグマ化されているか否かによって、被害に対する社会の捉え方が異なることに着目する。従事者はスティグマ化されており、従事者が行なうのは労働ではなく「単なる性的行為」だという一般認識がある。そのため、従事者は特性として単に性的にアクセスしやすい者と見なされ、従事者に対する性暴力は起こりえないと理解されてしまう。従事者の特性の誤認を防ぐため、セックスワーカーとして認識し労働者としての権利を認めること、売春防止法の規定における性風俗利用

者（以下、「利用者」と表記）と従事者の不平等性を是正し、スティグマ化を拒否することが鍵となる。

第3章「性風俗における性暴力」では、従事者に対する性暴力の文脈が整理されている。従事理由は多様であり、日本における貧困の女性化・従事時間の融通がきく点・性的トラウマ・性風俗従業員や親しい人々に加え見知らぬ人々からの影響などの多くの要因が複合している。そして、利用者や性風俗従業員（性風俗店の従事者以外の関係者）からの従事者に対する性暴力は、従事者のそれぞれの弱みにつけ込んで身体・金銭・法・地位にまつわる力の優位性を利用して行われる。

第4章「性風俗従事者に対する性暴力の不可視化」では、従事者という社会的カテゴリーによって性暴力が是認されている構造を探る。従事者がスティグマ化される原因として、「女性」従事者は「男性」利用者の求めるジェンダー役割から外れる面を持つことが挙げられる。従事者は利用者と対等な金銭取引を求めるが、既存のジェンダー役割に基づけば「女性」はそれをすべきでない。このように「男性」の秩序を揺るがしそこから外れる者、つまり従事者は、本来のジェンダー役割を思い知らせるべく「制裁」（性暴力）の対象にされてしまう。さらに、「道徳」や貞操を失った「不純」な者は社会的に「守られなくてもよい身体」と見なされ、スティグマ化される。そして、もし制裁による被害を訴えてもそれは不当な訴えであるとされ、被害者はバッシングに遭ってしまうという。

第5章「性暴力を可視化する」では、性暴力の可視化に向けた具体策が提案される。そもそも当事者が被害申告するためには、まず自身の被害者性獲得が必要となる。著者はそのために「サバイバル・セックス (Survival Sex)」という概念を提案する。現在「サバイバル・セックス」は経済的に「生き延びるための性風俗」という意味を示す。しかし、現実には経済面だけでなく「生きる意味を見出すため」に従事する従事者が存在するように、従事までの文脈は無数にある。その個々の背景を表現するため、著者は「サバイバル・セックス」に「語りえない」背景という意味を付加する。それにより、固定化された従事者のイメージが払拭されてスティグマも改善され、非難される対象が被害者から社会や状況に移り、性暴力の可視化に繋がっていくという。以上が本書の内容である。

これまでこの種の問題に関しては、性風俗とスティグマの深い関係性から、性風俗の是非論を語るべき／語るべきでないという議論が行われてきている。それに対し著者は是非論を避けるべきという立場をとるが、自身の立場を示すだけでなく、第5章で「サバイバル」という言葉の用法を新たに提起してその立場をさらに補強している。

本書では性暴力の可視化のために、性被害を語れる場の整備、法的改正

も提案するが、特に注目すべき点はこの言葉の新たな意味づけだ。従事者へのスティグマ化をなくすためには、我々の隣人レベルでの意識改革が必要とされる。そのために「サバイバル・セックス」の浸透が有効とされるが、現在は「売買春」という当事者間に閉じた言葉が用いられ、そもそも性風俗の抱える問題が社会一般の問題として認識されにくい状態になっている。そのような中で、「サバイバル・セックス」という言葉がどれほど定着するかは分からない。だが、もしこの言葉が使われるようになれば、性差別や主体性、暴力性など、性風俗を取り巻く諸要素が広く関心と議論の対象になり、スティグマが薄れる可能性が拓かれるのではないか。

著者も述べているように「サバイバル・セックス」という言葉は万能ではない。例えば、性的行為をすることが「サバイバル・セックス」なのか否か、第三者が一方向的に決めつけることの危うさはある。さらに、すべての従事者にとって「性風俗＝サバイバル・セックス」とは限らず、従事には常に語り得ない何かがあるというわけでもないという。このように、他者による外部からの定義づけの持つ危険性は払拭されておらず、適用範囲の定め方がこの言葉の使用の障害となり、普及の足かせとなってしまいうことが危惧される。

しかし、これまで複雑な背景や周囲からの影響を的確に言語化する術を持たない従事者たちは、社会的スティグマによって個々の事情が認識されずにきた。売買春をサバイバル・セックスに換言することで、各従事者の個性的生活の文脈が前面に出て、従事者への社会的偏見や差別の不当性が顕わになるだろう。新しい言葉の浸透が難しくとも、それがわずかでも浸透し始めれば多くの従事者にとって自己規定を変えるほどの大きな意義があるのではないだろうか。

本書は、性風俗の倫理面を論ずるわけではない。それよりもむしろ従事者が被る可能性のある性暴力と性風俗における「搾取的・差別的構造」とのつながりが見え難く、その構造が悪用されている現状を受けて、それを可視化させ、従事者たちへの不当な暴力を減少させることを試みたものだった。しかし一般的にこの問題をめぐる調査において、従事者・被害者に対してと利用者・加害者に対してとは、後者よりも前者が調査対象とされてきた。なぜなら、問題解決の糸口が前者に潜在しているとされていたからだ。そのような中で、著者は性風俗従事者に対する性暴力の種類や文脈を整理し、性暴力の様相を明らかにした。本書は、これから性売買や性風俗について考えていく上で、われわれが何を早急に考えなければならぬかを教示してくれている。